平成２６年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	漢文教育及び中国語教育における漢字学習の位置づけと効果的な学習法の研究

研究代表者

氏名	所属	職名
木村　守	アジア言語・文化研究	准教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ９ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

本年度は、資料調査を行った。まず、配分額が当初予算と大きくかけ離れていたため、急遽予定を変更して、日本国内の学会、教育現場での現地調査は見送り、資料整理や関連する調査研究のため、海外での資料調査を行い、国内での研究調査を補完することとした。ただし、国内での調査に関しては、予算を充てることはできなかった。

具体的な内容としては、漢文教育のための漢字教育及び中国語教育にとって、避けては通れない漢字教育を中心に、平成２６年１１月には、木村が北京・首都師範大学を訪れ、本研究テーマに関する文献調査を行った。

今後の研究成果発表のため、今回行った資料調査をもとに、現在、資料のインプット、整理を進めているが、今回の研究によって得られたことは、中間的結論としてではあるが、以下の通りである。

国語教師の多くは、「漢字教育」―「漢語教育」―「漢文教育」というものが、あたかも継続性をもった一連の流れの中に位置づけている感があるが、実際には、これらは継続性をもったものではない。少なくとも、日本において小学校から行われる「漢字教育」「漢語教育」と「漢文教育」は切り離して考えるべきである。したがって、「漢字教育」「漢語教育」「漢文教育」は個々にその指導法を考えるべきであるが、ただし、継続性がないことを意識して、それを補う方法を考えれば、ある程度の連続性は維持可能である。

なぜならば、日本の小学校で行われている「漢字教育」は、日本語のための「漢字」の教育であり、「漢語（すなわち熟語）」の教育である。しかしながら、「漢文」は、中国の古典であり、いわば中国語の文章である。中国語の文章を理解するためには、当然のことながら、中国語のための「漢字」教育が必要であり、中国語のための「漢語」教育が必要となる。その点において、「漢字」「漢語」の教育と、「漢文」の教育には連続性がないのである。

このズレをどのように解消するかが、今後の検討課題の１つでもある。

以上のことをふまえ、平成２７年度は、その成果の具体化をめざし、科学研究費等への経費申請を行うとともに、学会等での発表に向け、更に準備をすすめていく予定である。また、今年度の資料調査及び分析等によって得られた成果に伴い、新たにいくつかの課題もでてきた。そうした課題についても、研究対象を拡大し、より大きな成果を生み出せるよう、継続的に取り組んで行きたい。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに１部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

上記のように、本年度は、経費が極めて少なく、予備調査の準備にとどまらざるを得なかったため、各自、その成果を準備中であるが、平成２６年度は、特にそのテーマに関する論文などの予定はないが、次年度以降にこの成果を発表することについては鋭意検討中である。